

# いつの世も弱きを助け

週のはじめに考える

「つれぞでは知っていました。ジャーナリズム性加害問題との関係者の言い訳である。見当たりません。関東大震災での朝鮮人虐殺を事実上否定する政治家の言い訳で、こちらは政府の常とつ句だ。先日訪れた油縄・宮古島でも、戦中の日本軍用の慰

女性重視・派閥均衡内閣だ。閣僚の4分の1が女性であることを過去最高と持ち上げた時点で、ジェンダーバランスの解決はおぼつかない。性別にかかわらず、党要職も含め世襲議員が占める比率が高いのも相変わらずだ。こうして政治家が選挙ありきで動いていることを当然視した報道があり、それを知ったからりで解説する政局ジャーナリストをもてはやすテレビ番組や人事中心の紙面作りが、「政治は政局」の誤った空気感を作っている。国を代表する内閣は男女同数が当然だし、要説だけでなく国民の心に届き得る政治でなくてはならないことを、報道機関は忘れてはいないか。

そのテレビは、タレント事務所の性加害問題でも様子見どころか、いち早くタレント継続起用を打ち出し、人権ではなく視聴率を重視したようにみられている。商業放送企業体としてスポンサー次第である一方、報道機関としての姿勢をいち早く社会に示すことが求められていよう。かつてメテオ・ターは、菊(皇室)鶴(創価学会)星(米軍)と言われた時代があった。その後、電通や広告主がその座を占め、近年は西の吉本興業・東のジャニーズと称される時代が続いていた。主要放送局はいまだその呪縛にあることを、いみじくも表すことになっている。業界だけの当たり前を抜け出す機会を自ら摘んでいるといえるだろう。

## 時代を 読む



山田 健太  
専修大学教授

# 〈当たり前〉を超える

安所の存在を、証言は正式な記録ではないとして歴史の否定が続いている。事実かどうかは確認できなかったとい続けること、たとえあったとしても個人のしたこと、組織の問題ではないといけるることで、そこちあったかどうかが諸説あるとされ、結果的に歴史は消去され書きまわっていくことになる。

「書かない大記者」は政治の世界にもエンタメの世界にもいる。コロナ禍の外出自粛期間中に検事とジャーナリストをしたことが問題視されたが、ジャーナリスト担当記者も犯罪の隠蔽も含め事務所と一体化してきた過去とどう向き合おうかが問われている。

福島第1原発の処理水放出開始から1カ月余り。読者のみなさんから「心配でたまらない」「各国と比べて低い濃度での放出で、そこまで騒ぐ必要があるのか」など、賛否さまざまなき意見や疑問が寄せられています。多かっただけ取り除かれた放射性物質はどこに?」。

9月25日、東京新聞は「SDGs」な開発目標(SDGs)の中長期ビジョン「環境約束」を公表しました。負荷を減らし、多様性をや、より良い環境と居場にならざることを目標とします=GRコード。

新聞社には編集、広告、事業、販売、総務、技術などさまざまな部署があり

一人一人の自らの環境負荷を

**MEDIA** 足元から

**TOKYO** 東京発

**FUTURE** 未来へ

上りよ、環境博上

2023.10.1